

宝永年中、蓮馨寺之境木繁茂して、南の方、口を覆ひけるゆへ、草花の為よからずとて、大工町之人口をふさぎ……

とあるように、樹木が邪魔をしたとなつてゐる。それにしても、御花島の入口が、当時大工町から東に向かう道のみしかなかったといふのは、何を物語つてゐるのか。

従来、この点について、疑問が持たれたことはなかった。しかし、このことは、次の鳴町の記事と考へ合わせると、等閑にできない重みを持つてゐることがわかる。

鳴町 長式百七拾間

往古は此所大なる馬場也 其後鳴善太といへる刀鍛冶居住して一丁を取立 仍而鳴町と呼ならはせしよし (川越素麴)

町の名の由来は後述するとして、かつてこの町筋が大なる馬場であつたことは、国立公文書館内閣文庫蔵の『武州川越城図』に「ハヤミチ場」と記されてゐることからも確認できる。

御殿井馬場

昔は養寿院の境内なりしか伊豆守殿御代此所川近くと云万事の手都合能故 杉原三ツ谷の辺を代地として 境内凡三千坪余り是を引替られ 西の方表通りを馬場とし 御殿其外長屋を建られ 御馬屋方もの住居ス

馬場井鉄炮場

幅四間に長七十五間 是も伊豆守殿御代より出来たり 享保年中鉄炮場再御修葺を加えられ御家中の者鉄炮稽古場に成たりよな川の道に習ひて馬場を通シ東の末に塚有り (ともに「川

越索麴

などがあり、いずれも川の傍の低地であることがわかる。馬の世話をするには、何よりも水が必要であることから選ばれたものである。すると、かつての馬場鳴町も、低地にして水の得やすい場所だつたのではないかと推量されることが推量される。事実、鳴町は低かつた。そのことは、次の記載でわかる。

囚獄番屋敷 鍛冶町

西側今名主四郎左工門屋敷 古よりいかなる子細にや 囚獄番屋敷と言伝へたり 鳴町鍛冶町の境 昔も此所に木戸有之か中比たへぬ 近代火事沙汰繁キ故に木戸を立 鳴町よりの人口元ハ余ほとと坂なりしか星宿うつり行 ひとつとなく次第上りになりて 今ハ坂なし (川越素麴)

地誌に依らずとも、長く川越に住み慣れた人ならば、このことはすぐに了解されるであろう。志義町の四つ角に立つて、北の鍛冶町方面に目を向けると、現在でも土地が盛り上がりが見える。また志義町の町並みは、北側に並ぶ店々の方、南側に並ぶ北面の店々よりも、戸口が高いのである。この傾斜は、志義町通りと蓮馨寺北界との間に、東西に走る細い道辺りまで続く。この小道から見ると、南にある蓮馨寺は小高い地に載つてゐるのがわかる。言うまでもない、ここに谷があり、小道は谷の底に当たるといふことなのである。

蓮馨寺の北は谷であつたといふことになれば、前述した御花島の入口のことがわかる。東にだけ伸びていた道は、谷沿いの道であつたのであり、南側は谷への転落を防ぐ役も兼ねた築立や樹木であつたのだらう。御花島が廢され、屋敷地となつてから、志義町側に人口が設けられたのは、城への利便を考へてのこととみて間違いない。なお、この谷跡は、志義町に住む方たちの証言に依ると、数十年前まで一部の民家の庭に水溜りを遣しつづつ面影を留めていたといふことであるが、まさかそれが谷とは気づかなかつたといふ。それでは、この谷川はどう流れてゐたのか。川越の台地は、東に「久保」の名を有する町が広がるように、東が低い。従つて、西から東へと水は流れてゐたであらう。

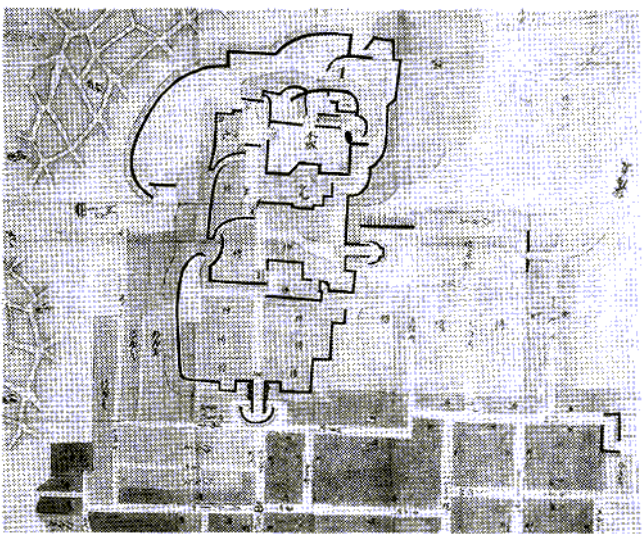
元禄七年の『川越御城下絵図面』(次原清氏蔵 大蓮寺保管に依ると、この川筋の猪鼻町を越えた先に、「舟奉行 下山藤太夫」の役宅が置かれてゐるのが見える。ここから舟が東に乗り出すことでもあつたのか。図には、川の線が描かれずにあるものの、水の存在は疑えないであらう。では、この谷川はどこまで溯れるのか。蓮馨寺の西の大工町の記事に、左のようなものがある。

大工町 長式百十間三尺兩側やしき敷合て十一軒

南は武士屋敷にして鳴町入口の方少々の町屋敷有り 但シ此所ハ松郷分なり 元来大工取立の町なれば今惣名大工町といふ家中と町屋の境兩側に杉林有り 元侍屋敷一軒の跡なり 享保三戊戌の回祿より火除のために植られたり (川越素麴)

実は現在でも、大工町とその西の六軒町との間の地に、この谷跡がほんのわずかに看取できる。かつて石山医院のあつた庭内である。三、四十年前までは、鬱蒼とした樹木の中に深い谷がくつきりと遺つてゐた。そこから谷はさらに西へ伸び、恐らくは、境町の妙昌寺近辺を抜けて、赤間川(現新河岸川)に突き当たつたのではないかと思われるが、六軒町以西に確たる谷の痕跡を辿ることは、今となつてはむずかしい(一部それらしい跡は存するものの)。

何も、川越台地を取り巻く赤間川の水をこの谷に呼び込まなくとも、谷には、台地に溜つた地下水や雨水が溢れ流れ出て、立派に川を成してゐたことは、十分想像できる。平成九年五月に川越水川神社の山田勝利氏が「埼玉民俗」十二号に発表された「民俗からみた水川神社」となる文章を読むと、水川神社の西側から北側には、台地の地下水脈の露頭から涌出す御手洗川が流れてゐたが、戦後、地下水が涸れて、今は道路になつてしまつてゐると述べてゐられる。蓮馨寺北の谷川も、ほぼ似たような状況を、かなり潮つた時期に起こしたもののなかではあるまいか。さて、それでは谷を東流した



武州川越城図(『日本分国絵図』より)国立公文書館内閣文庫蔵「町割から都市計画へ」(平成9年3月 川越市立博物館)より